

シンポジウム「翻訳から〈世界文学〉の創造へ——生誕 100 年パウル・ツェランを手がかりにして」(2020 年 10 月 24 日(土)15:00~19・00

特別ゲスト：多和田葉子（芥川賞作家）司会・パネリスト：関口裕昭(明治大学教授)

パネリスト：斉藤毅(ロシア文学者)、堀内正規(早稲田大学教授)、管啓次郎(明治大学教授)

明治大学駿河台校舎リバテイタワー1074 教室に、関口、斉藤、堀内、管が集合し、多和田氏はドイツのベルリンからオンラインで参加した。参加者は 70~80 名(時間帯により多少の変動あり)。

当日のタイムスケジュールと内容を示すと、以下のようになる。

第1部 ツェランと世界文学の翻訳 15:00~16:50

最初に導入として、関口がツェランの詩作と翻訳について概論を話し、ツェランはが、フランス語、ロシア語、英語など7か国語から41人の詩人の作品をドイツ語に翻訳したこと、また彼が翻訳を詩作と同等の高い位置に置いたことを豊富な実例をパワーポイントで示しながら解説した。

続いてロシア文学者の斉藤氏が、ロシアのオーシプ・マンデリシタームの出自、言語的な特徴、ツェランとの関係について語り、詩「不眠。ホメロス」について具体的に解説した。それを受けて司会者の関口がツェランのドイツ語訳の特徴を述べた。本シンポジウムでは、このように詩の原文と翻訳を比較しながら、具体的かつ実証的に検討するという方法を取っており、これは続く二人の詩人についても同様に行われた。

二人目のアメリカ文学者堀内氏は、エミリー・ディキンソンの詩作の特質を詩「四本の木が」について様々な解釈例をあげながら多角的に解説した。それを受けて関口はツェランの翻訳では原文のリスが消えているなど、創作的要素が強いことを具体的に話した。最後の管氏は、アンリ・ミショーの詩と造形芸術の両面にわたる多面的な創作活動について画像を示しながら解説し、詩「反撃だ！」をフランス語原文で朗読してから(この朗読が素晴らしかった)具体的に解説した。関口はドイツ語訳では原詩の「骸骨(Carcasse)」が Knochensack(ナチスのパラシュート舞台軍服の俗語)と訳され、ナチスに対する「反抗」の詩になっているのではないかという解釈を述べた。

第2部 多和田葉子氏の講演 17:00~17:45

続いて第二部では、ドイツ在住の作家多和田葉子氏が、ドイツ語で書いた新作小説 **Paul Celan und der chnesische Engel**(パウル・ツェランと中国の天使)の一部を朗読し、この作品を書いた経緯や目的などを、豊富なエピソードを交えて語った。この小説が、従来あまり論じられなかったツェラン晩年の詩集『糸の太陽』を、中国医学の経絡(ドイツ語で Meridian 「子午線」という。これはツェランの詩論のタイトルでもある)や糸掛け曼荼羅などを援用

しつつ、ヨーロッパと日本や中国を含めた東洋を結ぼうとする意欲的な作品であることがわかりやすく述べられた。

第3部 質疑応答 18:00～19:00

最初に第1部のパネリスト3名と司会者の関口が、第一部の総括の意味を込めて、ツェランの翻訳詩が、「世界文学」のなかで持つ現代的意味を語り合った。それから多和田さんを交えて、参加者からの質問に応じた。特に多和田さんが質問者に対して、多くの示唆に富む話をしてくれたことが印象に残る。コロナ禍における作家の役割、翻訳と創作を融合しつつある「世界文学」の潮流と今後について、ツェランやカフカなどの作家と自分の創作とのつながりなど、予定した時間を越えて多くの質問に対して丁寧に答えていた姿が印象的である。

終了後に寄せられた感想でも、「示唆に富む、啓発的なシンポジウムだった」「大成功でした」など極めて好意的なコメントが多数寄せられた。多和田さんはここ数年、ノーベル賞文学賞の候補になっている国際的な作家であり、今回のシンポジウムにお迎えできたことは、研究拠点としての明治大学を内外に大きくアピールできたと思う。機会があれば、今後もこのような試みを続けていきたい。(1594字)